第 20 章
市内の遺跡

●旧石器時代

およそ４万年前に大陸より渡ってきたと考えられる人類の痕跡が日本列島で見つかるようになります。地球上が氷河期と呼ばれる寒冷な気候の頃ですが、豊後大野市内にも多くの遺跡が所在しており、豊富な水源や、食料となる動植物を育む豊かな自然など、当時の人々の生活に適していた地であったと考えられます。縄文時代が始まる約１万６千年前までを旧石器時代と呼びます。

当時の石器には狩猟用の槍先と考えられる角錐（かくすい）状石器や剥片尖頭器（せんとうき）のほか、切る・刺すために使われたナイフ形石器、削る・引っ掻くために使われた削器（さっき）・掻器（そうき）など様々な種類があります。これらの石器づくりの材料には、近隣の河川や山間部を産地とする石材が利用されていますが、遠隔地から運ばれたとみられるものもあります。原始的な生活でありながらも他地域の人々との交流や流通も始まっていたことが推定されます。

ほかに石を集めて火を焚いた痕跡などもあり、雨露を防ぐ簡易的な小屋などに住みながら季節ごとに移動を繰り返す原始的な生活であったと考えられています。



旧石器の出土状況（百枝遺跡）

市内の旧石器時代遺跡

代ノ原遺跡（大野町屋原）では、湿地帯だったと考えられる当時の地層よりナウマンゾウ１頭分の骨格が見つかっており、このような大型動物が生息していた証拠となりました。この個体には人為的な痕跡はみられませんが、ナウマンゾウは旧石器時代まで生息しており、当時の人々の狩猟対象だったと考えられています。



代ノ原遺跡の調査

岩戸遺跡（清川町臼尾）は、昭和 42（1967）年の調査で多くの石器類が発見され、その中の注目すべき遺物としてこけし形石偶と呼ばれるものがあります。この付近では産出しない結晶片岩を加工して、頭部に目や口のような表現もあります。呪術や祈りに使用されたと推定され、旧石器時代では我が国初めての精神文化をうかがわせる資料として貴重なものです。その後も数次にわたる調査が行なわれ、墓地とみられる集石遺構がみつかるなどこの地域の代表的な遺跡として、昭和 56（1981）年に国史跡に指定されました。



岩戸遺跡

郡山南遺跡（大野町郡山）では、狩猟用に掘られた陥穴の遺構が見つかっています。遺物はありませんが、検出土層から姶良カルデラを起源とする

火山灰土（ＡＴ層）堆積頃の２万２千年より以前に掘られたものと推定され、この時期としては珍しい遺構です。

駒方遺跡群（大野町中原）では、台地の広範囲にいくつかの遺跡が調査されています。駒方Ｃ遺跡や駒方池迫遺跡では、槍先と推定される角錐状石器を主体とする横長剥片を素材とした石器群が伴うのに対し、駒方津室迫遺跡では基部に深い抉りを入れるナイフ形石器を主体とする石器群が出土しています。両者は時期差も考えられますが、石器の製作に異なる技法がみられます。

ほかにも百枝遺跡（三重町西泉）、津留遺跡（犬飼町田原）、原田第１遺跡（千歳町前田）でも複数の文化層があり、ナイフ形石器を主体とするものや角錐状石器・剥片尖頭器を主体とするものなどが見つかっています。



市内出土石器

これらの石器組成には時代による変化が見られ、旧石器時代の終末期には細石器とよばれる小さな剥片を素材とした石器に代わっていきます。市ノ久保遺跡（犬飼町大寒）で多く出土する細石刃（さいせきじん）は、小さく鋭い石刃を木の柄などに複数装着して取替えながら使用したと考えられる石器で、これを作り出す細石刃核と呼ばれる石器が多く出土しています。また、局部磨製石斧や石皿や敲石（たたきいし）の礫石器など縄文時代に似た石器もあり、生活形態の変化として次の縄文時代への画期を示すものとみられます。

ほかに細石刃を主体とする石器が出土されている松山遺跡（犬飼町大寒）、上下田遺跡（三重町川辺）、宮尾原遺跡（三重町宮野）、小牧遺跡（大野町後田）など、同じ旧石器時代終末時期の遺跡と考えられています。


細石核（上）と細石刃（下）

●縄文時代

縄文時代が始まる約１万６千年前より気候は温暖化が進み、自然環境に適応して人々の生活に変化が見られます。竪穴式住居が造られるようになり、他に炉穴や貯蔵穴なども現れます。遺物として土器が出現し、土器を使用した食物調理が始まったと考えられます。石器では弓矢を使った狩猟用の石鏃（せきぞく）も現れるほか、皮剥ぎの石匙（いしさじ）、土掘り具の打製石斧（だせいせきふ）のほか、磨製の石器なども作られるようになります。



縄文時代の石器

市内の縄文時代遺跡

縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六つの時期に区分され、豊後大野市内では最初の草創期以外の各時期の遺跡が確認されています。

早期の遺跡は、田村遺跡（朝地町池田：市指定史跡）、鳥穴遺跡（犬飼町田原）のほか竜千寺遺跡（緒方町上冬原）などが所在しています。この時代

の特徴である押型文と呼ばれる文様がある土器が見つかっています。

前期や中期の遺跡は少ないですが、前期の土器は、やや黒色の器壁に小さな突帯や沈線のある九州独自のものが千人塚遺跡（緒方町下自在）・左右知遺跡（清川町左右知）で、中期は縄文や爪形の文様を持つ瀬戸内周辺に分布するものと同じ特徴の土器が惣田遺跡（三重町菅生）・左右知遺跡で見つかっています。



縄文時代の土器　早期（左）・前期（右）

後期になると遺跡数は増加し、夏足原遺跡（大野町夏足）、池在遺跡（朝地町池田）、駒方遺跡（大野町中原）、川南原遺跡（大野町田代）、中道遺跡（大野町後田）、倉園遺跡（千歳町長峰）など各地で見つかるようになります。後期前半期には磨消縄文と呼ばれる模様の土器がありますが、後半期には表面が磨かれた黒色磨研系の土器が多くなります。呪術や祭具などに使われたと考えられる土偶なども見つかるようになります。



縄文時代後期の土器（左）・土偶（右）

遺構では竪穴住居が現れるようになり、下野遺跡（犬飼町下津尾）で円形の住居跡が見つかっています。また洞窟や岩陰を住居や墓地に利用した遺跡として、大恩寺稲荷遺跡（朝地町板井迫：市指定史跡）や草木遺跡（朝地町坪泉：市指定史跡）が知られています。



縄文時代後期の住居（下野遺跡）

縄文時代晩期も前半にかけては遺跡数も多く、大石遺跡（緒方町大石）は、昭和 36（1961）年以降の調査で多くの遺物が見つかりました。特に扁平な打製石斧は土掘り具、横刃形石器や石鎌状の石器は穂積具として、原始的な雑穀栽培の可能性を示唆するものとして取りざたされ、学会において縄文時代の農耕が提起されて注目されました。



縄文時代晩期の土器

ほかに宮地前遺跡（大野町片島）、下野遺跡（犬飼町下津尾）などが縄文晩期の遺跡として知られています。竪穴住居の遺構も増え、定住生活が始まるようになるほか、上田原東遺跡（三重町上田原）では複数の住居が集まった集落が形成されるようになります。

大型甕を使った埋葬の例として、駒方B遺跡では縄文時代晩期から弥生時代初頭の甕棺墓とみられる墓地遺跡が確認されています。



縄文時代の墓地遺跡（駒方B遺跡）

●弥生時代

約 2400 年前、稲作をはじめとした新しい文化が大陸より伝わり、新しい磨製石器や金属器も使用されるようになります。農耕の定着により食料の生産と供給が向上し、生活の安定や社会発展により人口が増加して集落の形成が進んでいくことになります。やがて大規模に発達した集落には有力な地域集団の発生と権力を持つ統率者の出現があったと見られます。

市内では、台地上に多くの弥生時代の遺跡が分布しています。これらの立地から水稲耕作よりも畑作生産による営みがあったと推定されます。

市内の弥生時代遺跡

市内の弥生時代早・前期の遺跡は少なく、駒方B遺跡（大野町中原）や夏足原遺跡（大野町夏足）、平石遺跡（千歳町長峰）からは壺（つぼ）や甕（かめ）を利用した早期～前期の埋葬遺構が見つかっています。



弥生時代前期の墓地遺跡（平石遺跡）



弥生時代前期の壺（左）・甕（右）

中期の遺跡は、住居跡がいくつか確認され、集落が形成されはじめたことがわかります。惣田遺跡（三重町菅生）や岡遺跡（大野町後田）からは円形の住居、近中遺跡（大野町大原）からは隅の丸い方形の住居跡が見つかっています。舞田原遺跡（犬飼町田原）や鹿道原遺跡（千歳町柴山）では花弁形と呼ばれる特殊な構造の住居跡も複数箇所で確認されています。



弥生時代中期の壺（左）・甕（右）

後期になると遺跡数は急増し、各台地上に竪穴住居跡や掘立柱の建物群が密集した集落が出現します。特に弥生時代後期の後半をピークに多くの集落が分布しています。

その中でも大規模に発達した集落として知られる鹿道原遺跡（千歳町柴山）は、工場建設に伴い 4 万㎡の範囲で調査が行なわれ、計 230 棟の竪穴住居と 221 棟の掘立柱建物がありました。住居は中期末から古墳時代初頭までの期間で、一時期に 30 ～ 50 棟ほど存在していた大集落遺跡の存在が確認されています。半地下式の竪穴住居の平面形は方形を基本とし、規模に応じて柱が 1 本～ 8 本の数が見られ、様々な構造であったと考えられます。

住居以外には高床式の倉庫とみられる掘立柱建物があり、複数棟並ぶように配置されていることが確認されています。



鹿道原遺跡

このような大規模集落遺跡は、ほかに高添遺跡群（千歳町長峰）のほか、陣箱遺跡（三重町百枝）、二本木遺跡（大野町大原）などで 100 軒を超える